

「ヨエル書」 יוֹאֵל — 私訳と注解

1:1

ペトウーエール	ベン	ヨーエール	エル	ハーヤー	アシェル	(ア)ドナーイ	デヴァラ
בֶּן-פֶּתוּיָאֵל		אֵל-יוֹאֵל		הִיָּה	אֲשֶׁר	דְּבַר-יְהוָה	
ペトエルの	子	ヨエル	に	臨んだ	～ところの	主の	ことば
固有名詞	名詞男単	固有名詞	前置詞	動完3男単	関係詞	固有名詞	名連男単

〔私訳〕

ペトエルの子、ヨエルに臨んだ主のことば

〔注解〕

● 「臨んだ」と訳された「ハーヤー」(הִיָּה)は、不可抗力的な神の主権性をもって主のことばがヨエルに臨んだという意味合いです。新改訳は「あった」と訳していますが、むしろ、口語訳、新共同訳のように「臨む」という訳の方が「ハーヤー」が持っている神の主権性を表わすのにふさわしい訳語のように思います。バルバロ訳は「(ヨエル)に向けられた」と訳していますが、なにか物足りない感じがします。ここでの動詞「ハーヤー」は、単に存在的に「あった」というのではなく、神の主権性の中に完全に捕らえられた状況の中でヨエルに働かれたというニュアンスです。「・・・に臨んだ主のことば」(דְּבַר-יְהוָה אֲשֶׁר הִיָּה אֵל-יוֹאֵל)という表現は、預言書の表題を表わす定型的フレーズで、ホセア書、ミカ書、ゼパニヤ書にも見られます。

● ちなみに、名詞の「ダーヴァール」(דְּבַר)は(ここ1節は連語形として)主の「ことば」の意味で使われていますが、ヨエル書2章11節では「命令」(新改訳)と訳しています。主の語った「言葉」(ダーヴァール)は、命令となり、約束となり、威嚇となり、戒めとなり、慰めとなった行為を伴う概念です。それゆえ「ダーヴァール」は、神ご自身の最高の示現形態と言えるのです。神の民はその「ダーヴァール」に耳を傾けるよう求められました。名詞の「ダーヴァール」(דְּבַר)は、動詞の「ダーヴァル」(דָּבַר)から派生したもので、その根本的な意味は「背後にあるものを前へ駆り立てる」ことです(ポーマン著「ヘブライ人とギリシヤ人の思惟」、植田重雄訳、新教出版社、1957年、102～109頁参照)。つまり名詞の「ダーヴァール」は、言葉と行為を併せ持った語彙で「言行」とも訳せます。単なる言葉だけでなく、行為を伴った言葉であるゆえに「出来事」という意味にもなります。換言すると、「前へと駆り立てられて」「語った」、その「言葉」が「行為」となって現われる、そしてそれが「出来事」となります。これはヘブル語が持っている特有な性格です。ギリシア語の「言葉」(ロゴス)は「集める」「秩序づける」、そこから「話す」「計算する」「思惟する」となって、「言葉」となります。ヘブル的思惟は「言葉」が「行為」が密接な関係を有するのに対して、ヘレニズム的思惟では「言葉」が「理性」と密接な関係を有していることが特徴です。

● 「ヨエル」という固有名詞は旧約で19個ありますが、同じ名前であっても、その苗字に当たる「ペトエルの子」とあるのはこの箇所には登場しません。岩波訳は「ペトエル」を「神は若々しい」の意だとしていますが、根拠が希薄です。「ヨエル」のプロフィールについての情報はきわめて希薄で、彼が語っている対象がユダの人々であったこと、また、祭司職について深い関心があったことしか分かりません。ちなみに、「ヨエル」(「ヨーエール」 יוֹאֵל)は「主は神」という意味で、「ヨー」(י)は神聖四文字の יהוהの短縮形です。